

「鷗」の詩に秘められた深い意味

先週から「鷗」の練習が始まりました。

カモメって自由に空を飛べていいなあ。空で恋をし、雲の布団で昼寝をし、海の食堂で魚を食べ、空の舞踏室で乱舞する。そんなカモメに私はなりたい、とか軽い歌詞のよう思っていましたら、ちょっとヘンです。

この歌は「♪ ついに自由は彼らのものだ」が3分の演奏時間で9回もしつこく繰り返されます。

同じフレーズがメロディーを変えて繰り返す歌としては「雨ニモマケズ」があります。こちらは「雨にもまけず風にもまけず～」が、7分の演奏時間に8回ですが、「鷗」には及びません。

それに意味が分かりにくい。歌詞の中にカモメが出てこないのに、題名を知らないで聴いている人には、「彼ら」がカモメを指すこととは分かりません。

さらに「ついに」が分からない。「ついに」と強調しなくてもカモメはいつでも自由ですやんか。

分かりにくい歌詞に何かが隠されていると思い、この歌をよく理解するために、インターネットでこの詩について調べました。

すると冒頭に書いたような軽い意味ではなく、戦争の影を残す重い詩であることが分かり衝撃を受けました。

三好達治（1900～1964）がこの詩を発表したのは、終戦直後の昭和21年のことです。

戦争中は誰もがそうであったように、彼も不本意にも戦争を賛美し戦意高揚の詩を書いていました。

また、戦場に出陣する学徒へ餞（はなむけ）の講演をしたりしていました。



詩人 三好達治

戦場に赴く高校生（旧制）を前にして、「なぜ、君たちのような若者が戦場に行かなければならないのか」と号泣して声がつまり、しばらくの間話せなかったこともあったそうです。

戦争が終わり、彼は多くの戦死した若者の魂を、自由に乱舞するカモメの姿に重ねて詩を作りました。

カモメは、学徒出陣前の学生たちの白い制服からのイメージだったのです。

「彼ら」とは、実は戦争で命を落とした学生たちの魂を指しています。

「ついに自由は彼らのものだ」とは、戦争が終わり戦死者の魂が自由に躍動しているさまを、カモメの姿に託して表現しました。

そう考えると「ついに」の意味がよくわかります。戦争中の若者には自由なんてありませんでした。死んでしまっただけでついに掴んだ自由です。

9回（原詩では12回）も繰り返されるこのフレーズには、深い鎮魂の意味が込められています。

紺青の海、そして、抜けるような青空の間を自由に群舞する白い鷗、そこに映える夕焼け、朝焼けの赤に学徒出陣で亡くなった学生の魂が漂っています。

木下牧子がこの詩にメロディーが付けたのは平成15年で、詩が作られてから実に57年、三好達治が亡くなってからでも39年も経っていました。

三好達治からすると、孫の世代の木下牧子ですが、詩の意味をよく理解してメロディーを付けています。彼女はブログで次のように書いています。



木下牧子（1956～）

繰り返し表現されている「ついに自由は彼らのものだ」という言葉に、強い祈りを感じる。

彼らは戦争で肉体を失ったけれどその魂は今、自由に飛び回っている…そんなイメージが湧いて来る。

そうか、「鷗」という歌は鎮魂歌だったのか。

亀岡弘志（記）